弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科
幸山　靖子

作成日　2024年1月16日

1. 教育の責務

2013（平成25）年度から弘前学院大学看護学部に採用され、本年（2024）で11年目となる。
看護学分野で主に基礎看護学領域を中心として、講義・演習・実習を担当している。
また、社会福祉学部の授業も担当している。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
看護学概論	1年	講義	前期	「看護とは」なにかの探求
基礎看護技術論	1年	演習	前期	看護に共通する援助技術
基礎看護技術演習Ⅰ	1年	演習	前期	看護実践のための援助技術（日常生活行動の援助技術、生命活動を支える援助技術）
基礎看護技術演習Ⅱ	1年	演習	後期	看護実践のための援助技術（日常生活行動の援助技術）
基礎看護技術演習Ⅲ	2年	演習	前期	治療・処置に伴う援助技術
ヘルスアセスメント	1年	講義	後期	フィジカルアセスメント
看護過程論	2年	講義	前期	最適かつ個別的な看護を提供するための問題解決の方法
基礎看護学実習Ⅰ	1年	実習	後期	対象理解、コミュニケーション
基礎看護学実習Ⅱ	2年	実習	前期	対象理解、看護過程の展開
看護統合実習	4年	実習	前期	慢性期看護
卒業研究	4年	演習	通年	基礎看護学、看護教育に関するテーマ

2. 教育の理念

「看護」については、さまざまな定義がある。私は「看護」を「相互主体性」に基づいた「人間的実践」としての「技術」であり、すなわち「臨床知」である、と捉えている。

「看護学」とは、一般に看護を学問として体系化されたものと捉えられ、「看護現象」を人間、看護、健康、環境という分析的要素に対応して接近していくものという考え方もある。しかし、私は、「看護学」とは「臨床の知」としての実践学であるととらえている。その「看護学」を現在「講義」「演習」「実習」で構成されている担当科目を通して、どのように具現化していけるかが課題であり研究テーマでもある。

また、「教育」の本質を、学生の「人間的成長」に置きたい。学生が自らの経験を再構築しながら、「看護」を創造していく過程において、一人の人間として成長していくと考える。

私が基礎看護学領域で担当する科目は、1・2年生に開講している。大学に入学してきた学生が「人、もの、こと」に関心を持って関わり、自分の頭で考える学生を育てたい。初学者に「看護とは何か」の問いが生まれるように、「講義」「演習」「実習」を通して、学生自らの探求が始まるように関わっていきたいと考える。

3. 教育の方法

「看護過程論」の場合

2011年日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会によると「看護過程は、看護の対象となる人々と看護実践者との対人的関係の中で成立し、展開するものである。すなわち、看護過程は、対人的援助関係の過程を基盤として、看護の目標を達成するための科学的な問題解決法を応用した思考過程の筋道である」と定義されている。

看護過程は最適かつ個別的な看護を提供するめのツールであるが、それが目的ではない。その看護過程のプロセス（①アセスメント②看護診断③看護計画立案④実施⑤評価）について、紙上患者（ペーパーペイシェント）を用いて講義・演習にアクティブラーニングを取り入れている。

進め方は、事前課題(4回)⇒講義(8回)⇒紙上事例の個人学習⇒グループワーク(6回)⇒プレゼンテーション(1回)で構成している。事前課題は評価の20%の配分を提示し、数年前からルーブリック評価し学生へフィードバックしている。グループワークでは、グループダイナミクスを考慮した8グループを作成し、グループで課題［①アセスメント(情報収集、解釈・分析)②全体像（看護診断を含む）③看護計画立案］をディスカッションしている。その際にファシリテーターとして関わっている。また、グループで作成した看護計画を最後の発表会でプレゼンテーションをおこなっている。

しかしながら、一人で担当しているため、学生のアセスメントへの個別指導に十分な時間を割けない事がジレンマである。

4. 教育の成果

評価について、「授業評価アンケート」結果を踏まえて記す。

1.「学生自身の自己評価」に関して
全ての項目の平均値は、全学および学部の平均値より高かった。しかし、「4. そう思う」が一番低かったのが問7「シラバスに記載された到達目標を達成出来ると思う」であった。

2.「授業担当者に対する評価」に関して
問7「教員は熱意をもって授業に臨んでいる」そう思う82%、問10「教員は、提出したレポートや課題をチェックして学生に返し、授業の内容の理解に役立てようとしている」そう思う80%、問11「教員の授業方法や使用した教材は、授業の内容の理解に役立つように工夫されている」そう思う82%であった。
問8「学生の理解度や反応を考慮して授業を行っている」は、「4. そう思う」66%、「3. まあそう思う」28%とを合わせて94%で肯定的評価であったが、他の設問に比べるとそう思うが低かった。その理由として、この科目は7月末から開始される基礎看護学実習Ⅱの履修要件の科目のため、7月上旬には評価を終える必要がある。そのため、2回/週の授業を4週にわたり開講する必要があった

3.「授業内容に対する評価」に関して
問13～18の項目は、「4. そう思う」と「3. まあそう思う」と合わせると9割以上で良い結果であった。その中で「4. そう思う」の回答が低かったのは、設問14「この授業の進め方のペースは適切である」であった。「授業担当者に対する評価」同様に、7月末から開始される基礎看護学実習Ⅱの履修要件の科目のため、2回/週の授業を4週にわたり開講する必要があった。

5. 教育の改善

上記4の「授業評価ンケート」結果を踏まえて、改善すべき点を記す。

1.「学生自身の自己評価」に関して
授業最終日は試験の前であり、学生自身がどこまで到達目標を達成できたのか実感が持てないとも考えられる。最終日の看護計画の発表会を通してフィードバックを強化したい。

2.「授業担当者に対する評価」に関して
この科目は7月末から開始される基礎看護学実習Ⅱの履修要件の科目のため、7月上旬には評価（試験）を終える必要がある。そのため、2回/週の授業を4週にわたり開講する必要があった。以上のような制約はあるが、授業・演習が効果的に行えるように授業・演習計画を見直したい。

3.「授業内容に対する評価」に関して
「授業担当者に対する評価」同様に、7月末から開始される基礎看護学実習Ⅱの履修要件の科目のため、2回/週の授業を4週にわたり開講する必要があった。以上のような制約はあるが、授業・演習が効果的に行えるように授業・演習計画を見直したい。また、提出課題を通して停滞している学生の状況を早期に把握し、面接など個別に関わる機会等を持ちたいと考える。

6. 教育の目標

短期的には、「授業評価アンケート」の結果を踏まえて、授業方法を改善したい。その結果の可視化については、2024年度「授業評価アンケート」で確認したい。
中長期的には、学生各自の学習効果・成果の向上が期待される方策を目指したい。また、「看護過程」を活用しつつ、離床判断を問う教育を考えたい。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 学生提出の課題レポート
4. 定期試験結果
5. 授業改善書